

**NHK ラジオ番組『幼児の時間』における
音楽教育プログラムとその変遷**
—1935（昭和10）年から1952（昭和27）年を中心に—

大 地 宏 子

**The function of musical education of
the NHK radio program “The Infant Hour” :
Its historical role and transformation from 1935 to 1952**

Hiroko OCHI

Abstract

Aiming for the creation of new nursery rhymes for the post-war era, NHK’s “The Infant Hour” radio program, which began in 1935, commissioned rising composers and songwriters of the time. Many of the children’s songs that are still popular, including “Tonbo no megane (*The Glasses of Dragonfly*),” “Medaka no gakko (*The School of Killifish*),” and “Zōsan (*The Elephant*),” were made for “The Infant Hour”. Tracing the history of the program and using reports from the Broadcasting Culture Research Institute, I investigated the mode of receptor through and broadcasting script and listening experiments on listener, in the rhythm and teaching singing in this paper ingenuity and educational considerations for the infant was observed, enlightening character of the show as a ‘school broadcasting’ was revealed.

Key words

radio broadcast, The Infant Hour, school broadcasting, children’s song

はじめに

現在、多くの幼稚園や保育所で歌われている子ども（幼児）の歌の中で、いわゆる幼児保育の定番として挙げられる歌唱曲がいくつかある。例えば、《たきび》、《とんぼのめがね》、《めだかの学校》、《ぞうさん》、《かわいいかくれんぼ》などは今なお歌い継がれ、幼児教育や保育の歌曲（童謡）集には必ず掲載されているが、これらの曲がNHKの『幼児の時間』というラジオ番組で生まれ、放送されたことはあまり知られていない。昭和10（1935）年に放送を開始した『幼児の時間』では、戦後の子どもたちに向けた新しい童謡が数々生まれた。これら『幼児の時間』から生まれた歌の数々は、昭和24（1949）年に始まった『うたのおばさん』という歌番組で、「うたのおばさん」と呼ばれた声楽家の安西愛子や松田トシによって、さらに歌い広められた。

さらに興味深いのは、『幼児の時間』では童謡や唱歌が紹介されるだけでなく、「歌のおけいこ」や「リズム遊び」や音楽鑑賞など様々な音楽教育が、当時の一流の音楽家たちの指導によって放送されていたことである。先の安西や松田はもとより、四家文子やダン道子らの声楽家や、弘田

龍太郎や佐々木すぐるら多くの作曲家たちが戦前より音楽番組の講師として出演していた。こうした戦後におけるラジオを通じた子供対象の音楽教育の実体については、これまで研究されることが少なく、とりわけ『幼児の時間』における音楽教育に着目した先行研究は皆無に等しい¹。

そこで本論では、『幼児の時間』の音楽番組に注目し、本番組が開始された昭和10（1935）年からテレビ放送の始まる前年の昭和27（1952）年を中心に、その変遷と内容を明らかにするとともに、聴取の実態にも光を当て、昭和25（1950）年に行われた同番組の聴取実験を通して、当時の子どもたちにそれがどのように聴かれていたのかを浮かび上がらせることを目的とする。また、この聴取実験において放送されていた番組の「放送台本」が残されており、当時の放送録音が皆無である現在、唯一この台本が放送内容を再現できる資料である。本稿ではこれを用いて、『幼児の時間』が行っていた音楽教育の有りようを明らかにし、ラジオ放送が果たした子どもたちへの音楽教育の一端を考察したい。

1. ラジオ放送黎明期の子ども番組—『幼児の時間』の位置づけと理念

日本で初めてのラジオ放送（仮放送）が東京放送局において行われた大正14（1925）年3月22日からおよそ3カ月後、同年7月12日に東京本放送が始まった。この日の番組表には、近衛秀麿の指揮するシンフォニーや陸軍戸山学校軍楽隊による吹奏楽曲、他に長唄等の邦楽曲など、大部分が音楽番組で占められている中に、「童話（子供の時間）」というプログラムがある。本放送初日に現れたこの「子供の時間」というタイトル名が、ラジオ放送における最初の子ども番組である。以後、『子供の時間』は放送時間が定まらないまま、童謡と童話を交互に毎日放送を続けていたが、翌年（1926年）9月より午後6時からの30分番組として定着し、少しずつ番組内容を充実させていきながら、昭和41（1966）年までの41年間放送を続けた²。

『子供の時間』は当初、聴取の対象を学齢期前の幼児から中等学校の低学年としていたため、その年齢層の広さが問題となっていた。そこで対象年齢を細分化すべく生まれたのが、学齢期前の幼児を対象にした『幼児の時間』であった。昭和10（1925）年に「学校放送」の放送とともに始まった『幼児の時間』³は、放送開始当初は「小学生の時間」や「教師の時間」と共に「学校放送」に属していたため、『子供の時間』に比べ教育的要素を強く持った番組だったといえる。また、『子供の時間』が夕方、主に家庭に居る子どもを聴取対象にしていたのに対し、『幼児の時間』は概ね午前10時台に10～20分間放送され⁴、家庭のみならず幼稚園や保育所等の教育（保育）機関での聴取を前提としていたため、集団保育の中に取り入れられるように工夫した番組でもあった。

ここで「学校放送」について触れておこう。ラジオ放送開始の十周年記念事業の一つとして全国的に実施された「学校放送」は、昭和10（1925）年4月15日、松田源治文部大臣の「朝礼訓話」によって始まった。主に小学校の教員児童、幼稚園の園児などを対象に、小学教育の補習的内容や幼稚園児の情操教養、並びに小学校教員の修養資料としての番組だったため、文部省との関わりが強く、放送編成会議においては毎月一回ずつNHK局内の委員会だけでなく、外部の教育家や識者など約10名を学校放送委員に委嘱し、会合協議決定を行っていた⁵。この学校放送委員の中で、『幼児の時間』に関係していたと思われる人物として、例えば昭和10（1935）年度には当時東京音楽学校講師であった梁田貞や東京女子高等師範学校（現御茶ノ水大学附属）の保母兼教諭の及川ふみ⁶、また昭和11年度には同じく東京女子高等師範学校教授の倉橋惣三、学習院教授

の小松耕輔らの名が見られる⁷。

このような理念のもとスタートした『幼児の時間』では、当時の保育要項に則った番組内容が編まれていたことが確認できる。例えば、放送初年度の昭和10年には唱歌や童話が週に一度交互に放送されている程度だったが、翌年以降には「観察話」というプログラムが現われるようになる。これは、大正15（1926）年に公布された幼稚園令によって、それまでの「遊戯」「唱歌」「談話」「手技」の4項目に、新たに「観察」が幼稚園の保育内容として加えられ、5項目となったことが反映されたものと思われる。また、番組の出演者の中には内山憲尚、山村きよ、小林つや江ら幼児教育家たちの名前も見られ（後述する「番組確定表」の調査より）、文部省の幼稚園教育に見合った番組制作を意図していたことがうかがえる。さらに戦後、昭和22（1947）年に教育基本法、および学校教育法が公布され、厚生省に児童局が新設されたのを機に、「幼児番組も視聴者との結びつきを大切にしようと、[昭和22年]二月から、NHKのスタジオにお母さんと幼児三〇〇名を呼び、公開放送を始めた」ことを、当時の番組チーフディレクターを務めていた武井照子氏は証言している⁸。以後、終戦前後にわずかな中断はあるものの、昭和10（1935）年から昭和38（1963）年まで約28年間⁹、『幼児の時間』は「学校放送」としての理念に基づいた番組づくりを続けた。

2. 『幼児の時間』の番組内容の変遷

（1）音楽プログラム

NHKのラジオ放送番組については、NHK放送博物館が所有する「番組確定表」によって確認することができる。ここには仮放送初日（1925年3月22日）から現在まで、放送された番組名、曲名、出演者名などが一日ずつ時系列にすべて記録されているので、『幼児の時間』で放送されたプログラムについても放送初日（1935年4月16日）から調べることができる。この「番組確定表」の調査により、『幼児の時間』における番組内容とその変遷を明らかにしていく。

昭和10年2月23日に日本放送協会から逓信大臣床次竹次郎宛てに提出された「学校放送新設計可申請書」には、

「幼児ノ時間

幼児（学齡ニ達セサル者ナルモ幼稚園ニ入園セルト否トニ拘ラス略之ト同年配ノモノ）ノ情操
教養資料タルモノ

例エハ唱歌ノ範唱、簡易ナルオ話、手工等¹⁰

とあるように、放送初期（昭和12[1937]年8月まで）は週に一度（時には放送のない時もあり）、唱歌や童話、または観察話などを流していた。

昭和13（1938）年度からは、月曜日から土曜日まで毎日放送されるよう番組編成が改訂され、「お話」「お話と唱歌」「童謡・唱歌」「歌のおけいこ」「リズム遊び」「童話劇」など多様な番組内容が見られるようになった。なかでも音楽に関するプログラムには力を入れていた様子が、『ラヂオ年鑑』から読み取れる。昭和13（1938）年の『ラヂオ年鑑』には、前年度の放送プログラムについて「幼児には唱歌音楽を主としたものが最も喜ばれた」、「いろいろの童謡唱歌を管弦楽に編曲し」たものを放送していたことが記されている¹¹。また、昭和15（1940）年のそれには聴覚聴取を一義とするラジオの特性から、音楽を主体としたプログラム編成に積極的に組んでいたという、次のような記述も見られる。

幼児低学年向けの放送は放送目的が生活訓練的の説話を主としたものであっても、否それであればある程、音と声のリズムを生かして行くことを考えなければ効果は上らない。幼児低学年は内容の筋を追ってゆくよりは、スピーカーを洩れる聲音の調子に餘計惹かれるからである。即ち音楽唱歌が最も喜ばれる所以であり、お話ならば反復、押韻、漸層、比較等のテクニックを要する所以である。この意味で管弦楽の「童謡おもちゃ箱」「リズム遊戯雨だれ太鼓」「汽車ごっこ」「お手、つないで」等のリズムを主としたもの、これといふ内容はなくとも、お話と唱歌の渾然とした効果を狙った連続童謡物語「小さなお馬車」が喜ばれた¹²。

戦後の昭和21（1946）年度以降は、以下のように番組内容の性格を曜日ごとに定めて放送するようにした結果、月曜日から土曜日に示された6種類の番組内容のうち、金曜日を除いたいずれの曜日にも音楽に関わるプログラムが生まれ、音楽または音楽的なものを多く取り入れた番組編成がより明確化されている。

月曜：歌のおけいこ

火曜：音楽あそび（音感・リズム感・テンポ感等を基礎としたもの）

水曜：お話と歌（平易な歌とお話をおりませで、幼児の生活を豊かにするもの）

木曜：ラジオ絵本（お話に擬音効果等を配して立体化し聴覚を通じて視覚的映像を描く底の教養に資するもの）

金曜：童話・劇（侵略的・軍国的な要素を要するものや民主化に支障あると思われるものを払拭して、平和と愛と正義に根ざした素材を採用すること）

土曜：音楽（第一土曜は「いい音楽をききましょう」）

以上のプログラム編成については、先の「番組確定表」においても確認できる。日曜日を除き毎日放送されるようになった昭和14（1939）年5月と6月、および番組内容を曜日ごとに定めた昭和21（1946）年5月と6月における『幼児の時間』の番組内容を、『子供の時間』のそれ（昭和21年は音楽に関するプログラムのみを表記）と並べて一覧にしたものを表1にまとめた。表中の各左側に示した『幼児の時間』において、各月の音楽に関するプログラムを数えると、左から順に17日、14日、19日、18日と、月の半分から3分の2は音楽プログラムで占められていることが分かる。一方、各右側に示した『子供の時間』におけるそれを同様に数えると、左から順に8日、9日、8日、10日で、音楽プログラムは月の約3分の1弱である。こうした両番組の比較を通して、『幼児の時間』が音楽プログラムを多数放送していたことが明らかであろう。

（2）新しい「童謡」への取り組み

さらに注目したいのは、昭和21（1946）年の番組編成で定められた月曜日の「歌のおけいこ」である。とりわけ『うたのおばさん』という新たな歌番組が誕生した昭和24（1949）年以降、『幼児の時間』の番組制作者たちは、戦前の童謡（大正期の「赤い鳥」を契機に生まれた童謡）や、戦中・戦後に音楽業界を席卷していたレコード会社の主導による「レコード童謡」¹³（「子供の流行歌」とも呼ばれた）とは一線を画した戦後の新しい童謡を作りたい、との思いで当時の新進作詞家、作曲家に戦後の新しい歌を委嘱した。それは「童謡」ではなく、「幼児のうた」と呼ばれ、『幼児の時間』ではNHKの委嘱による「幼児のうた」が、月曜日の「歌のおけいこ」で発表、放送されたのだ。さらに、「[[昭和]26年1月から、『幼児の時間』で幼児向けに新作した歌を、『うたのおばさん』のなかで2週間続けてうたうようにしたため、幼児たちはつぎつぎに新しい歌を覚えるようになった」¹⁴。すなわち、本稿の冒頭で述べた現代の子どもたちによって愛唱されてい

表1 番組確定表より

昭和14年 5月		同年 6月			昭和21年 5月		同年 6月	
幼児の時間	子供の時間	幼児の時間	子供の時間	日	幼児の時間	子供の時間	幼児の時間	子供の時間
童話	お話	お話	お話	1			うたのおけいこ	
童話	吹奏楽	ラヂオ・アソビ	仲よし子ども唱歌会	2	たのしい謠			仲よし希望音楽会
オハナシ	物語	童謡・唱歌・他	物語	3			歌あそび	
うたのおけいこ	お話		? / 科学物語	4	たのしいうた		お話と歌	名曲をききましょう
童話劇 うたのおけいこ	?	童謡・玉手箱	お話	5	小さな音楽会	仲よし音楽会		
唱歌	お話と音楽	お話	お話?	6	歌のおけいこ		楽しい歌	
	ラヂオスケッチ/童話劇	お話	?	7		名曲をききましょう	お話と音楽	仲よし希望音楽会
童話おもちゃ箱	童話	お話と音楽	物語	8		童謡唱歌集	歌のおけいこ	
オハナシ	?	リズム遊び	連続劇	9	たのしい歌			小さい音楽会
リズムあそび	?	童謡・玉手箱唱歌他	お話	10			お話と歌	
お話と音楽	お話		歌絵巻/?	11	たのしい歌		リズム遊び	名曲をきませう
お話と音楽	ラヂオヴァラエティ	小さな音楽会(一)	童謡ヴァラエティ	12	小さな音楽会		楽しい歌	
よい音楽	ラヂオヴァラエティ	お話	世界の名作から(六)	13	歌のおけいこ			
?	ラヂオ・ドラマ	童謡物語	世界の名作から(七)	14	音あそび	名曲をききましょう		仲よし音楽会
童話物語ラヂオの?	音楽会	連続童話	ラヂオ理科教室	15			うたのおけいこ	
うたのおけいこ(一)	世界の名作から(四)	連続童話	童話	16	たのしい歌		お話と歌	
うたのおけいこ(二)	世界の名作から(五)	童謡・唱歌他	うたのおけいこ六月	17			ラヂオ遊戯のおけいこ	名曲をききましょう
指あそび	童謡		うたのおけいこ/ラヂオドラマ	18	たのしい歌			
お話と音楽	連続劇	ラヂオ紙芝居	対話劇	19		ピアノと童謡	たのしい歌動物園	
独唱と斉唱	うたのおけいこ	オハナシ	不思議問答	20	うたのおけいこ		対話と歌	
	うたのおけいこ	童謡物語	童話劇	21	リズム遊び	名曲をききましょう		
ナシ	ハーモニカ合奏	歌のおけいこ(一)	お話	22				
オハナシ	お話と録音	歌のおけいこ(二)	童話劇	23	たのしい歌	アコーディオンと童謡		小さな音楽会
おとのナゾナゾ	斉唱と合唱世界唱歌名曲集	童謡・唱歌他	輝く進軍(三)	24	対話と歌		お話と歌	
連続童話	国史劇		管弦楽(解説付)/童話劇	25	みんなで歌ひませう			名曲をききましょう
連続童話	ラヂオ理科教室	小さな音楽会	子供のオーケストラ	26			ラジオ遊戯のおけいこ	
よい音楽(レコード)	輝く進軍	童話	音楽劇	27	歌あそび		たのしい歌	
	管弦楽/童話	童謡物語	科学劇	28		名曲をききましょう		アコーディオンと童謡
リズムあそび	お話	お話	科学劇	29			みんなで歌ひませう	
オハナシと唱歌	不思議問答	管弦楽と独唱	斉唱と合唱世界唱歌名曲集	30	たのしい歌			
お話	物語			31	楽しい音楽			

※音楽を扱った番組には影を付け、判読不能部分は?で示している。

(作表者：大地宏子)

る童謡の多くは、『幼児の時間』の「歌のおけいこ」で歌われた「幼児のうた」だったのである。

昭和27（1952）年からは「あそびましょう」というリズム遊びのコーナーが始まり、小林純一と中田喜直のコンビによって、歌いながら体を動かす「遊び歌」も数多く作られた。《手をたたきましょう》や《大きなたいこ》などはその典型で、これらも現在の保育教材の定番曲となっている。

以下に、著名な「幼児のうた」を放送年代順に列挙してみよう。

昭和24年度：《たきび》（巽聖歌詞渡辺茂曲）、《うみのみず》（まどみちお詞平岡均之曲）、《とんぼのめがね》（額賀誠志詞平井康三郎曲）他

昭和25年度：《つみき》（まどみちお詞中田喜直曲）、《たかいたかい》（与田準一詞細谷一郎曲）、《おつかいありさん》（関根栄一詞團伊玖磨曲）、《風さん》（小林純一詞平井喜四男曲）、《いたずらすずめ》（関根栄一詞中田喜直曲）他

昭和26年度：《かわいかくれんぼ》（サトウハチロー詞中田喜直曲）、《こなゆきこんこ》（飯島敏子詞平井喜四男曲）、《みつばちぶんぶん》（小林純一詞細谷一郎曲）他

昭和27年度：リズム遊び「あそびましょう」（小林純一作 中田喜直曲）より《手をたたきましょう》《大きなたいこ》他。《ぞうさん》（まどみちお詞團伊玖磨曲）、《ことりのうた》（与田準一詞芥川也寸志曲）他

『幼児の時間』におけるこうした取り組みが、同時期の児童文学界をも巻き込み、戦後の新しい童謡を切り開く重要なエポックとして働いた点は、見逃せない。また、「学校放送」としての性格をもつ『幼児の時間』が、教育啓蒙に重点を置き、「レコード童謡」からの脱却を目指した番組編成を目指したことも、同番組の特筆すべき役割として挙げられる。

3. 聴取の実態

ではこの『幼児の時間』は、同時代の人々（子供たち）によってどのように受容されたのか？

どのような番組が好まれていたのか？ また番組内容について聴取者はどのような感想をもっていたのか？ このことを推し量るための貴重な資料が、昭和25（1950）年に放送文化研究所によってまとめられた『幼児向け放送の研究』という報告書（放送文化研究所蔵）である¹⁵。ここには同年1月から3月にわたり、東京都下の公立幼稚園と保育所を対象に行った『幼児の時間』の聴取実験を中心とする研究の結果報告と、実験期間内に放送された番組35本の台本が記録されている。この台本記録は、当時の放送の録音が皆無である中、それを再現できる唯一の資料としてもとりわけ注目されよう。本稿で一部紹介し、放送の実態に迫りたい。

（1）利用頻度

ラジオ放送が開始された当時、ラジオはまだ高価であったこともあり（当時の大学卒初任給は65～70円で、聴取者の大半が使用していた鉱石式受信機は10円前後だった）、ラジオに対する期待と好奇心は相当高かったものの、仮放送前（大正13 [1924] 年度）の契約者数は5,000人強（普及率は0.1%／100万世帯）にすぎなかった。しかし、『幼児の時間』の放送が始まった昭和10(1935)年度の契約者数は240万人を超え（普及率は17.9%／同）、その後戦中、戦後も契約者数を伸ばし、昭和25（1950）年には900万人を突破し、55.4%の普及率（市部61.2%、郡部51.1%）をみた¹⁶。

ラジオの聴取契約者数が徐々に増加していく中で、『幼児の時間』はどれくらい聴取されていた

たのだろうか？とりわけ本稿で扱う年代においてはほとんど資料が残されていないため、その正確な数値を知るのは難しい。というのも、小学校をはじめとする諸「学校」におけるラジオ受信設備の有無や番組聴取率などの調査記録は数多くあるが、幼稚園という教育機関は「学校」に含まれるものの、その調査対象からは外れているからだ。『幼児の時間』の全国の聴取率を知り得るほとんど唯一の資料は、昭和17（1942）年度の「都市農村別番組聴取率」として示された聴取率調査によるもので、同番組の聴取状況は市部で26%、郡部で29%とある（調査票回収率は市部で42%、郡部で36%）¹⁷。なお、昭和11（1936）年3月末現在の「我國地方別ラヂオ施設学校数一覧」¹⁸によると、ラジオ受信装置を備えた幼稚園の数は全国で480園（東京府132園、大阪府89園、兵庫県39園等）で、同年の全国幼稚園総数1,946園¹⁹に対する受信設置率は24.7%である²⁰。これらの断片的な数値から同番組の聴取率を導き出すのは難しいが、昭和10年代には全国でおおよそ3割程度、聴取利用されていたであろうことは推測できる。

具体的な数値を示した調査資料がほとんど残されていない中、東京都において『幼児の時間』がどのように聴取され、どのような番組が好まれていたかを知り得る資料が、前述の放送文化研究所編『幼児向け放送の研究』（1950年）である。本調査における被験者は、東京都下の公私立幼稚園・保育所（報告書にはすべて「保育園」と表記されているが、以下「保育所」で統一する）344の園長（保母）とその園児たち、および東京放送局管内の聴取加入者の家庭で、これらの保育施設に通っていない幼児をもつ母親308人を対象としている。

ここで、当時の幼稚園の園数と保育所の施設数、および就園率について触れておこう。まず幼稚園について、沖縄を除く全国46府県別の幼稚園数の推移を示した総理府統計局の調査によると、本章で取り上げる『幼児向け放送の研究』が行われた昭和25（1950）年における全国の幼稚園総数（国立・公立・私立すべて含む）は2100園²¹で（翌26年以降、急激に増え始め、昭和31年には6000園を超える勢いで増え続けている²²）、府県別に見ると多い順に、東京307園、兵庫215園、大阪150園、と都市部が上位を占めている。しかしながら100園以上の園数があるのはこの3府県の外に、徳島の115園を加えたわずか4園にとどまり、大半は50園未満（10園未満は4府県）であるため、全国的にはかなりのばらつきが見られる²³。

就園率に目を移すと、昭和26（1951）年の総園児数が244,423人で、うち5歳児の就園率は12.1%である（昭和25年の就園率の統計はない）²⁴。ただし、府県によって数値の開きが大きい上に、とりわけ興味深いのは必ずしも都市部の就園率が高いとは限らないことだ。時代は少し下るが、昭和30（1955）年の47都道府県別の5歳児就園率を示した統計によると、高い順に香川（72.2%）、徳島（61.4%）、兵庫（54.5%）、大阪（46.8%）、静岡（42.8%）、岡山（41.2%）、福井（39.7%）と地方が散見される一方、幼稚園数が突出して多い東京は29.5%でそれほど高い就園率ではない（全国平均は21.8%）²⁵。

次に、保育所については戦後の昭和22（1947）年度以降の施設数と入所児童数の推移を示した統計表によると、昭和25（1950）年の全国の保育所数は公私立合わせて3,684園で、入所児童数は292,504人である²⁶。通所率の統計は記されていないが、同年の幼稚園の総園児数と保育所のそれはほぼ同じであるため、昭和25年度における保育所の通所率は10%程度であったと推察できる。

以上の統計データより、昭和25（1950）年当時の東京都下の幼稚園、および保育所の就園率は決して高いとはいえないが、このことをふまえ、以降は『幼児向け放送の研究』の報告書を援用しつつ、『幼児の時間』の聴取の実態を概観してみよう。

まず、「『幼児の時間』はどれ位きかれているか」という問いに対して、幼稚園・保育所では以

表2 幼稚園・保育所における聴取率

	合計	幼稚園			保育園		
		計	公立	私立	計	公立	私立
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(344)	(216)	(41)	(175)	(128)	(42)	(81)
きかせている	45.3%	45.8%	66.0%	42.2%	44.5%	42.6%	45.6%
きかせていない	53.5%	53.3%	36.6%	57.2%	53.9%	55.3%	53.2%
回答なし	1.2%	0.9%	2.4%	0.6%	1.6%	2.1%	1.2%

(註) 100%の下の括弧内は実数を示す。

下の表2²⁷の結果になっている。

幼稚園と保育所の差異はそれほどなく、全体として約45%の園が保育のためにこの番組を利用していることが分かる。ただし、これはラジオを設置していない園も含めた数字であり、ラジオの設備を持つ園に限定すると、62%が保育に利用していることが報告されている。

また、番組を利用している幼稚園・保育所について、「一週の利用回数」は以下の表3²⁸の通りである。

表3 幼稚園・保育所における一週の利用回数

	合計	幼稚園			保育園		
		計	公立	私立	計	公立	私立
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	(156)	(99)	(25)	(74)	(57)	(20)	(37)
6回	12.8%	9.1%	24.0%	4.1%	19.3%	25.0%	16.2%
5回	1.3%	1.0%	0%	1.4%	1.8%	5.0%	0%
4回	6.4%	6.1%	12.0%	4.1%	7.0%	10.0%	5.4%
3回	17.9%	18.2%	20.0%	17.6%	17.5%	10.0%	21.6%
2回	19.2%	19.2%	16.0%	20.3%	19.3%	10.0%	24.3%
1回	9.6%	7.1%	8.0%	6.8%	14.0%	10.0%	16.2%
不定	27.6%	31.3%	12.0%	27.8%	21.0%	30.0%	16.2%
回答なし	5.1%	8.1%	8.0%	8.1%	0%	0%	0%

(註) 100%の下の括弧内は実数を示す。

幼稚園・保育所ともに不定と回答した園が最も多いが、保育所においては6回（日曜日を除き毎日）利用している園が少なくないことに注目できる。また、幼稚園より保育所の方が利用頻度が高いが、幼稚園での利用頻度が低くなる要因の一つは、幼稚園は保育時間が短いうえに教育課程が定められているため、ラジオを聴かせる（園生活に取り入れる）時間を確保するのが困難であったことが推察される。

一方、幼稚園や保育所に通園していない家庭にいる幼児に対して、『幼児の時間』を聞かせている母親は308人中126人（約41%）で、「週に何回きかせているか」という問いについては以下の表4²⁹の結果が得られている。

表4 幼稚園・保育所に通園していない幼児における一週の聴取平均回数

計	6回	5回	4回	3回	2回	1回
100%	27.0%	8.7%	14.3%	32.5%	12.7%	4.8%
(126)	35.7%		46.8%		17.5%	

(註) 100%の下の括弧内は実数を示す。

週に3～4回聞かせている母親が半数近く、5～6回が3分の1強で、平均すると3.9回となり、利用頻度として低くはない。なお、「子供と一緒に聞く」母親は約26%であった。

2) 興味を持たれた番組

幼稚園・保育所において、実験期間中に放送された35本の番組に対して、幼児が「興味を持った」番組を高い順から上位8位を示したものが表5³⁰で、家庭にいる幼児に『幼児の時間』を聞かせている母親126人に対して、「どのようなものを幼児が喜ぶか」尋ねた結果、得られた164の内容の内訳を表したものが表6³¹である。

表5 幼稚園・保育所の幼児が興味を持った番組()内は題材・教材名

1	劇 (こぶとりじいさん)
2	劇 (ギーバタン)
3	お話と歌 (仲よしたっちゃん) / 音あそび (熊の散歩)
4	劇 (象のエレンちゃん)
5	お話 (きんのわら) / たのしい音楽 (北風坊やと笛)
6	歌のおけいこ (はねつき)
7	劇 (歌のおにごっこ) / 歌のおけいこ (春が来る)
8	お話と歌 (冬のこども) / 音あそび (お客様ごっこ)

表6 通園していない幼児が興味をもつ番組

	100.0% (164)
歌 (おけいこを含む)	44.4%
お話	21.6%
リズム遊び, 音あそび	12.3%
音楽	11.6%
劇	6.7%
ラヂオ絵本	1.8%
はなし合い	0.6%
その他	0.6%

保育施設と家庭では聴取状況(形態)が異なるため、上記の結果を単純比較することはできないが、家庭に居る幼児の多くが「音楽」に関する番組を好むのに対し、幼稚園・保育所では「音楽」よりも朗読を中心とする「劇」が上位を占めている。しかしながら、両者とも幼児たちの多くが『幼児の時間』の音楽番組を好んでいたことは、これらの調査によって明らかにされている。

(2) 実験番組の評点と台本にみる『幼児の時間』の音楽教育

ここからは『幼児の時間』の代表的な音楽教育に関する二つの番組「歌のおけいこ」と「リズム遊び」を例に取り、各番組についての聴取実験の結果と放送台本より、『幼児の時間』における音楽教育を考察してみよう。聴取実験とは、実験期間中に放送された35本のすべての番組について、実験担当者(=実験園の保育)が園児たちの聴取の様子を、興味/理解/注意の三つの面から捉え、以下の観点からそれぞれの判定を行ったものである(「評点」欄)。

興味：園児の聴取扱いを観察し、興味をもって聴いていたと認められる園児が聴取開始時の数の2/3以上ならばA、2/3未満1/3以上ならばB、1/3未満ならばCという評価を、年長者と年少者の別に与える。

理解：聴取直後に園児にテストをすることによって、番組の内容がわかったかどうかを判定し、「興味」と同様に評価を与える。

注意：10分間の番組を前半と後半に分け、その各々で注意の集中していた園児がどれ位あったかを観察によって判定し、園児の数により「興味」および「理解」と同様に評点をつける。

こうした評点の他に「特にプラス又はマイナスになった個所」の欄には、実験担当者の報告した箇所を挙げ、括弧内にその件数を示している。

なお、実験期間中に「歌のおけいこ」では4曲（《はねつき》《つみき》《春が来る》《つぼみのうた》）、「リズム遊び」では3曲（《羽根つき》《ホーホケキヨ》《春が来る》）放送されているが、前者の例としては先のアンケートで幼児の興味が最も高かった《はねつき》（6位）を、後者の例としては同番組の音楽講師として最も出演回数が多い弘田龍太郎が指導を務めた《ホーホケキヨ》を、それぞれ以下に紹介する（同報告書に楽譜は掲載されていないが、分かり易くするために筆者が添付した）。

① 歌のおけいこ「はねつき（二）」昭和25年1月31日放送



評点	興味			理解			注意			
	全体	年長者	年少者	全体	年長者	年少者		全体	年長者	年少者
	A	A	B	B	A	B	前半	A	A	A
						後半	A	A	B	
特にプラスになった個所							唱歌が始まる時（1）			
特にマイナスになった個所							話の時（1）			

実験担当者の批判

* 下線筆者

題材の選び方扱い方について	「季節的にずれている」という批判が殆ど全部
内容の程度や傾向について	「①曲が楽しくリズムカルなので歌いやすく、歌詞も（一）（二）と連絡がよく出来ている。（但し覚える、覚えないう問題は外として）。然し②幼児には音域が広すぎ（八度と思う）、もう少し程度のやさしいものがほしい。」 「メロディー、リズム、テンポはよいが、③七小節から十小節までは休止符がないのでむづかしい」という意見があった。

演出の仕方について	「渡せ」と「渡そ」の言葉の違いをはっきり説明すること。
出演者について	歌詞をもっとはっきり子供にわかるように、つたえてほしい。
総評その他	<p>全体として「中」の程度というのが一般の批評。 「アナウンサーが『幼児の時間です』という『幼児だって』と新しい言葉に興味を持つ。自分と幼児との関係がわからないらしい。又当園の子供には指導者の言葉がていねいでききなれない」という報告がある。</p> <p>特に批判を求めた点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「この時間だけで覚えられるか」 「覚えるという意味が歌詞，メロディー，リズム全部を正確に覚えるということなら絶対に無理である。母や保姆が世話をしながら覚えさせたとしても正確に覚えることは殆ど不可能だろう。大体覚えるということも年少者には殆ど不可能である。かりにそのときはうる覚えに覚えたとしてもすぐ忘れてしまうだろう。あとから繰返し唱う機会がなくて忘れられてゆくのではないか。 2. 「覚えられないとしたら，どういう点を改めればよいか」 <p>指導方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 中間の説明，話を出来るだけ省いて，メロディート歌詞を何度も，くり返すこと。 ・ 「幼児の時間」の前後で今週の歌のけいこで習ったものを必ずかるく指導すること。 ・ 歌詞を覚えさせるのにもっと工夫が必要。 <p>回数その他</p> <p>④一週置いて二度目の放送のようだが，歌は間をおいては覚えにくいので出来るなら二・三日は続けてやった方がよい。</p>

台本

アナ 幼児の時間でございます。

音楽 シグナル（レコード）

アナ お小さいみなさん，お早うございます。今日は、「はねつき」の歌を⑤松田トシ先生にもう一度おけいこして頂きましょう。歌は若草こども会のお友達，ピアノは山口喜久子先生，さあはじめますよ。

松田 「音楽 ピアノー一回きかせる」

この間 おけいこをした「羽根つき」のお歌ですね。きれいな羽子板，可愛いハネ，はねつきはうれしいですね。さあ お友達をよんで「ハネツキ」しましょうか？

詞（ヨム） 追羽根 こばね 小鳥になって

空まで上れ 一イニウ三イ四オ

五つで返そ 花子さんに渡そ

歌（ウタウ）全

おやおや 皆さんの顔が段々ニコニコしてきましたよ。きつとちゃんと覚えていらっしやるのね。早く歌いましょう……ですって？そう，ではこゝにいらっしやるお友達と御一緒に元気よく歌いましょう。

①前奏——一番 合唱

②もう一度歌いましょうか 詞を先によむ

③今の様にもう一度歌ってください。

ハネを高くつくとお空で丁度蝶々がとんでるように，ヒラヒラきれいに舞っています

ね。

ヒー、フー、ミー、四一、五つで晴江さんに返しますよ。

落としちゃ駄目よ。しっかりね。

詞 追羽根こばね 蝶々になって
ひらひらよ 一、二、三、四
五つで返せ 晴江さんに渡せ

うたってみましょう。

①範唱

②おけいこ（カンタンに）

③子供合唱 一回

④子供 ソロ

⑤子供 一番二番 合唱時間迄何回も

アナ 「はねつき」の歌のおけいこはこれでおしまいです。

皆さんよく覚えましたか。上手に歌ってお家の方をびっくりさせてあげましょう。

では又あしたね さようなら

以上³²

【実験担当者の批判と台本にみる考察】

《はねつき》（権藤花代作詞・弘田龍太郎作曲）は、昭和16（1941）年に文部省より国民学校初等科2年生用の芸能科音楽の教科書として発行された『うたのほん下』に掲載された楽曲である。本教科書の「教師用」には「芸能音楽科指導の実際」として「視唱練習」には「ろ～二点ホ音の幹音名を教える」³³（すなわち11度の音程）ように書かれており、《羽根つき》についての指導要領として、要約すると以下の点を挙げている。

1. 8分音符は同書に掲載されている楽曲（20曲）中、これを含め2曲のみであるから、十分に指導すること。
2. この楽曲は律動的構造（リズムを意味していると思われる）がかなり複雑であるため、特に次の形は十分注意して指導しなければならない。



3. これまで掲載されたへ調音階の楽曲は、いずれも第四音と第七音を欠くものだったが、この楽曲において初めて第七音、すなわち導音が用いられているため、旋律形式の発展したものとして注意を要する。

また、「歌い方」については、軽快に歌うことを第一に、他に発音上の注意（旧字体の読み方）や強弱の具体的な指導が書かれている³⁴。

以上をふまえ、実験担当者の批判と台本について、主に下線部分に注目して考察してみたい（以下の番号は表中の下線番号に従う）。

- ①符点が多く用いられた楽曲は、幼児にはリズムカルで歌いやすく感じられるという点では好ましい選曲であったと思われる。
- ②しかしながら、この楽曲が11度の音域を学ぶ国民学校初等科2年生用の教科書『うたのほん下』に掲載されていることを顧慮すると、「幼児にとって音域が広すぎる（批判文中には8度とある

が、実際には9度)」という点では選曲に問題があったことが認められる。

③一般的にはフレージングは4小節で構成されるが（すなわち2小節単位でプレスが取れる）、この楽曲においては変則的に7小節目から10小節目までフレージングが続いているため、途中の8小節目と9小節目の間でプレスが取りづらくなっていることによる。

④批判の大半は、10分間の番組内ではメロディーやリズムが覚えられないため、繰り返しの反復練習を求めるものである。また「歌のおけいこ」では一つの楽曲を2週続けて指導する編成になっているが（今回の聴取実験で使われた「歌のおけいこ《羽根つき》」の放送は二週目、すなわち2回目の歌唱指導であった）、週に一度しか放送されないため反復練習にとって効率が悪い、との意見を受け、翌昭和26（1951）年1月より「歌のおけいこ」の放送は、「月、火と2日続きにして習得の便を図る」³⁵ように変更された。

⑤歌唱指導を担当する松田トシとピアノ伴奏の山口喜久子は、前述した『うたのおばさん』という歌番組においても二人で歌唱指導に当たっている。歌唱した若草子ども会（若草児童子供会の

1)

ウグヒス

ウグヒス

ニハクメノ コエダダ ウグヒス ハ
ニユキノ オヤマダ キノフダダ

ハルガ キタヨド クタヒマス
サトヘ キタヨト クタヒマス

ホケキョ ホケキョ ホケキョ
ホケキョ ホケキョ ホケキョ

3)

鶯

(へ調二拍子)

編者 田村兵

アサヒガ マジシロシロノキダニ

アサヒガ マジシロシロノキダニ

アサヒガ マジシロシロノキダニ

アサヒガ マジシロシロノキダニ

2)

梅に鶯

♩=100

ニハクメノ コエダダ ウグヒス ハ
ニユキノ オヤマダ キノフダダ

ハルガ キタヨド クタヒマス
サトヘ キタヨト クタヒマス

ホケキョ ホケキョ ホケキョ
ホケキョ ホケキョ ホケキョ

アサヒガ マジシロシロノキダニ

アサヒガ マジシロシロノキダニ

アサヒガ マジシロシロノキダニ

アサヒガ マジシロシロノキダニ

評点	興味			理解			注意			
	全体	年長者	年少者	全体	年長者	年少者		全体	年長者	年少者
	B	A	B				前半	B	A	B
							後半	B	B	B
特にプラスになった箇所	リズム：ホーホケキョの箇所（4）						鶯の鳴声を反復させた箇所（1）			
特にマイナスになった箇所	芦田恵之助作の歌詞難解（4）			ホーホケキョ以外の歌の歌詞が難解（3） 歌の発音がハッキリせず 保母にも理解し得ない（1）						

ことと思われる)は、その当時ラジオやレコードで活躍していた数ある合唱団の一つである。

台本には、「蝶々がひらひら舞っているように」というイメージを幼児に喚起させる言葉が何か所見受けられるが、「教師用」教科書が指導の要点として挙げていたような歌い方に関する具体的な指示や注意点などに言及することなく、楽曲を最初から最後まで数回歌うことに終始している印象を受ける。

② リズム遊び「ホーホケキョ」昭和25年2月21日放送

実験担当者の批判

*下線筆者

題材の選び方扱いについて	①リズム遊びにうたわれる歌は簡単なものゝ反復か、幼児が知っている歌がよい。中の二つの歌は難解で幼児向きでないという指摘が各園からなされた。
出演者について	弘田氏の指導法はよかった。しかしゆかり文化幼稚園の園児は少し不自然だったという批評が一、二の園から出た

台本

アナ 幼児の時間が参りました。

音楽 シグナル (レコード)

アナ お小さい皆さん、お早うございます。今日は弘田竜太郎先生と、ゆかり文化幼稚園のお友達に「ホーホケキョ」のリズム遊びをして頂きましょう。皆さんも一緒にあそびましょうね。ピアノをひいて下さるのは若林五百子さんです。

弘田 もう梅がさいてるでせう。きれいで、そしてよい香りがしますねえ。日のあたる時などよく鶯が来ます。鶯は何と云って啼くのでせう。

一同 ホウ ホウ ホケキョ ホウ ホケ キョ (反復)

弘田 では手をたゝきながらいゝませう。

一同 ホウ ホウ ホケキョ ホウ ホケ キョ (ピアノ)

弘田 そうですね。今日は二拍手の拍子 一二 一二だけでした。所が之はホケキョですね。ホケキョ ホケキョ

一同 ホケキョ ホケキョ (反復)

弘田 それではホウ ホウからつづけて

一同 ホウ ホウ ホケキョ ホウ ホケ キョ (反復) (ピアノ)

弘田 (ソレ もっと面白く、うれしそうに)

斉唱 ウグヒス

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. ウメノ 小枝デ、ウグヒスハ、 | 2. 雪ノ オ山ヲ キノフ 出テ、 |
| 春ガ 来タヨト ウタヒマス。 | 里ヘ 来タヨト ウタヒマス。 |
| ホウ ホウ ホケキョ、 | ホウ ホウ ホケキョ、 |
| ホウ ホケキョ。 | ホウ ホケキョ。 |

(相手反復)

弘田 鶯はかわいゝ鳥。いい声で歌をうたいます。あゝゆう無理をしない自然な声で私達も歌いませう。所が、鶯の鳴き方にはいろいろありますよ。今度は少しむづかしい。出来るかな。

ホーホケキョウ（反復）と云うのもあります。

やってみましょう。

伊藤弘子 ホーはいくつのばすのですか。

弘田 さう。これが一番大切な所です。ホーと三つのばします。ホーそしてホケキョと短くね。

つづけますと、⑤ホーホケキョーとなるのです。

では皆さんも、きいている皆さんも、一緒によくそろえてやってみませう。

弘田 ④拍手 タンプリン 一二三と数える。もう一度 もう一度)

一同 ホーホケキョ（反復）

斉唱 梅に鶯

- | | |
|--|--|
| <p>1. 日のよくあたる庭前の
垣根の梅が咲いてから、
毎朝来ては鶯が
かはいい聲で
ほうほけきよう。</p> | <p>2. 鳴くのを聞いて縁側の
籠の中でも鶯が
垣根の方を眺めては、
調子を合はせて
ほうほけきよう。</p> |
|--|--|

弘田 もっとむつかしいのをやってみましょう。

ホーホケキョ ホーホケキョ ⑤ケキョ ケキョ ケキョ ケキョ ホーホケキョ
みんなで云ってみませう。

一同 ホーホケキョ ホーホケキョ ケキョ ケキョ ケキョ ケキョ ホーホケキョ

弘田 ケキョケキョケキョケキョと早く云うのですが、はっきり云って下さい。

ケコケコケコケコではコケッココーのはとりになりますよ。

言葉ははっきり云うのです。ケキョケキョケキョケキョ。はい。

一同 ケキョケキョケキョケキョ（反復三回）

弘田 では田中勝世さん

田中 ケキョケキョケキョ（三回）

弘田 片山喜史さん

片山 ケキョケキョケキョ（三回）

弘田 藤田恵美子さん

藤田 ケキョケキョケキョ（三回）

弘田 きいている皆さんも御一緒に はい

一同 ケキョケキョケキョケキョ

弘田 それでは初めからやってみませう。初めは何でしたかね。ケキョケキョで忘れてしまいましたよ。え、と、あ、そうそう 初めはホーホケキョと二回
はい

一同 ホーホケキョ ホーホケキョ

弘田 それから ケキョケキョケキョケキョ はい

一同 ケキョケキョケキョケキョ

弘田 次は ホーホケキョ 一回だけです。はい

一同 ホーホケキョ

弘田 それを続けて
 一同 ホーホケキヨ ホーホケキヨ ケキヨケキヨケキヨケキヨ ホーホケキヨ(ピアノ一回)
 弘田 もう一度
 一同 ホーホケキヨ ホーホケキヨ ケキヨケキヨケキヨケキヨ ホーホケキヨ
 (ピアノ反復三回)
 斉唱 鶯

1. 朝日がさした 隣の梅に	2. 朝日がさした 後の藪に
あれあれ 聞こえる	またまた 聞こえる
ホーホケキヨ ホーホケキヨ	ホーホケキヨ ホーホケキヨ
ケキヨケキヨ ケキヨケキヨ	ケキヨケキヨ ケキヨケキヨ
ホーホケキヨ	ホーホケキヨ
あのよい聲で 優しい聲で	あのよい聲で 優しい聲で
明日も来て鳴け 鶯よ	明日も来て鳴け 鶯よ

弘田 今迄の中で一番やさしい鶯の鳴き声はどれでしたか。

野村力 一番初めに歌ったのです。

弘田 みんな、さう思いますか

一同 はい

弘田 それでは ホウホウホケキヨ ホウホケキヨの(拍手)

一番初めのウグヒスをも一度歌いませう。

斉唱 (初めの歌)

アナ 「ホウホケキヨ」リズム遊びはこれでおしまいです。

又あした。歌のおばさんまで。皆さん さようなら

以上³⁶

【実験担当者の批判と台本にみる考察】




リズム指導を担当した講師 弘田龍太郎(前例の《羽根つき》を作曲)は、NHKのラジオ放送における子ども番組には最も多く出演していた作曲家である。彼は東京音楽学校(東京藝術大学)の作曲の教授として務めていたが、自ら退職した後、ゆかり文化幼稚園を設立し、初代園長として幼児の音楽教育に尽力した。ゆかり文化幼稚園の園児たちは、弘田の担当する他の子ども番組にも出演している。

この「リズム遊び」で使用された楽曲は次の三曲である。

- 1) ウグヒス(林柳波作詞・井上武士作曲), 『ウタノホン上』文部省, 1941年所収
- 2) 梅に鶯(文部省唱歌) 文部省『尋常小学唱歌第二学年用』国定教科書共同販売所, 1911年所収
- 3) 鶯(芦田恵之助作詞・田村虎蔵作曲) 佐々木吉三郎・納所弁次郎・田村虎蔵共編『尋常小学唱歌1年生』国定教科書共同販売所, 1905年所収

①楽曲の2)と3)(とりわけ後者)においては「歌詞が難解であるため、幼児に分かり易い選曲が望まれる」という批判が多く見られたようだ。3曲はいずれも小学校1年生、ないし2年生用の曲集であるが、楽曲1)が昭和16年発行の教科書であるのに対し、2)3)ともに明治時代に発行された唱歌であるため、歌詞が難解に感じられたものと思われる。

②③⑤歌詞を顧慮すると適切な選曲とはいい難いが、リズムを段階的に体得していく学習過程には工夫が見られる。すなわち、音符の名称ではなく、言葉のリズムを利用して音価の違いを自然に習得させる仕掛けになっている。

②11～12小節部分	③15～16小節部分	⑤9～10小節部分
 ホウ ホケ キヨ	 ホーホケ キヨ	 ケキヨケキヨケキヨケキヨ ホーホケキヨ

④口唱歌だけではなく、手拍子やタンブリンを交えながら指導していることにも注目できる。こうした一連の指導を、弘田がテンポ良く進め、かつ何度も繰り返したことが台本から読み取れ、それが聴取者にも評価されたようだ。

弘田龍太郎は戦前を中心に、大正期の童謡に数多く作曲したことで著名だが、前例の《羽根つき》もそうであるように、彼の多くの曲はヨナ抜き音階で作られている。大正期の童謡ではそれが主流であったが、戦後『幼児の時間』などで活躍をした芥川也寸志や中田喜直や團伊玖磨らは、その多くを七音音階で作っている。彼らがNHKの委嘱による「幼児のうた」を作り始めたのが、ちょうどこの聴取実験が行われた頃であったことを鑑みると、弘田の選曲した楽曲は昭和の子どもたちにとってはいささか古かったのではないかと考えられる。

本論では紙幅の都合上、2本の番組台本を紹介することにとどまったが、ここからも戦後におけるラジオを通した幼児を対象とする音楽教育の一端をうかがうことができるであろう。

おわりに

『幼児の時間』はNHKラジオ放送の開局から10年後の昭和10(1935)年から始まった番組で、当初より唱歌や童謡など、ラジオを通した幼児の音楽教育に積極的に取り組んでいた。だが戦後になるとこの番組は、大正期の童謡、あるいは戦中・戦後に音楽業界を席卷していた「レコード童謡」とは一線を画した、新しい童謡の制作を目指して、当時の新進作詞家や作曲家たちにそれを委嘱するようになる。これは「幼児のうた」と呼ばれ、これら『幼児の時間』で誕生した多くの歌が、今日に至るまで子どもたちに歌い継がれている。本論文では、以上のような『幼児の時間』の時代毎の変遷を辿ると同時に、戦後におけるその同時代的な受容を明らかにすることを目的とした。その際の資料は、放送文化研究所が1950年に行った聴取実験とそれについての報告書である。東京都下に限定した調査ではあるが、この未公開資料によって、当時の子どもたちが番組をどのように聴き、どのような内容に興味を示していたのかが具体的に分かるのである。またこの資料には、かなりの数の放送台本も含まれており、当時の放送の録音がまったく残されていない中で、どのように番組が構成されていたかが分かる貴重な資料となっている。とりわけ重要なのは、ラジオを通した音楽教育を目指した同番組のありようである。つまり『幼児の時間』はいわゆる「学校放送」であり、戦前の歌謡曲的な「レコード童謡」からの脱却を目指した、啓蒙的な番組編成を行ったのである。

注

1 戦後の童謡と『幼児の時間』（および『歌のおばさん』）との関連性について、児童文学界ではすでに論考が

- なされている（安藤一郎・佐藤義美編『世界童話文学全集18世界童謡集』講談社、1961年、306-314頁／小林純一「幼児のうたの成り立ち」『日本童謡』第6号、学習研究社、1971年、2-9頁／こわたまみ「戦後童謡四十年の軌跡—その流れと人と—」『季刊どうよう』第20号、チャイルド本社、1990年、9-15頁／畑中圭一『日本の童謡誕生から九〇年の歩み』平凡社、2007年など）。
- 2 『子供の時間』についての詳細や同番組における音楽教育についての研究は、葉口英子「昭和初期（1925-1937年）のラジオ番組『子供の時間』にみる音楽に関する考察」『静岡産業大学情報学部研究紀要10』2008年、79-96頁、および大地宏子「NHK ラジオ番組『子供の時間』に見る戦前の音楽教育の一考察—番組月刊誌『コードモのテキスト』における『特選童謡』を中心に—」『鶴見大学紀要第3部保育・歯科衛生編』第48号、2011年、51-60頁を参照。
 - 3 大阪中央放送局（BK）では、東京より先行して昭和8（1923）年から『幼児の時間』の放送を始めていた。
 - 4 放送開始初年の昭和10年度は毎週火曜日の午前10：10から10分間（12年4月からは15分間）、12年10月から毎週火曜日と金曜日の午前11時から15分間、14年度から日曜を除く毎日午前9：45から15分間（16年度からは午前10：00から10分間）…という具合に、戦前は放送時間が定まっていなかった。
 - 5 しかしながら、日華事変以降の戦時体制によって設置された情報局の権力行使などに伴い、改組当初からの諮問機関である放送審議会や放送編成会の存在意義はしだいに薄らぎ、昭和16（1931）年にはそれらの会議は廃止されるに至った。さらに同年4月に国民学校制度が実施されたのを機に、「学校放送」は「国民学校放送」と名称を変え、その結果、同9月には文部省告示をもって『幼児の時間』を含む「国民学校放送（＝学校放送）」は教科用図書などと同様に教材として、教科書と同格の立場で学校教育に参加するようになった（国民学校令施行規則に基づく）。また、文部省は省内に学校放送研究会を設け、その指導・監督を強化するようになり、番組の指導統制は次第に強まっていた。
 - 6 『ラヂオ年鑑 昭和10年』日本放送出版協会、1935年、15頁。
 - 7 『ラヂオ年鑑 昭和11年』日本放送出版協会、1936年、47頁。
 - 8 武井照子「幼児番組の変遷〈その3〉～終戦後の番組再開から『うたのおばさん』まで～」『放送教育』9月号、日本放送教育協会、1995年、71頁。
 - 9 どの資料にも放送の終了時期が表記されていないため、それを正確に断定するのは難しいが、次の二通りが考えられる。一つは、『幼児の時間』という大タイトルが『母と子の窓』に改称された昭和38年をもって終了したとするか、あるいは昭和40年に大タイトル『みんなのしく』（昭和39年に『母と子の窓』から改称）が外れて以降、ここに含まれていた個別の番組名がタイトルそのものとなり、そのうちの一つ「お話でてこい」という朗読番組の放送が今なお続いていることから、現在も放送継続中と考えるか（すなわち今年で78年目の放送を迎える）、いずれかである。
 - 10 日本放送協会編著『20世紀放送史上』日本放送出版協会、2001年、133頁。
 - 11 『ラヂオ年鑑 昭和13年』日本放送出版協会、1938年、103頁。
 - 12 『ラヂオ年鑑 昭和15年』日本放送出版協会、1940年、150頁。
 - 13 昭和2（1927）年にコロムビア、ビクター、ポリドールのレコード会社が相次いで創立され、大正期に作られていた童謡を次々とレコード化し始めた。その後、各レコード会社は作詞家、作曲家、歌手、オーケストラ楽団に専属制度を敷き、自社で新たに作った童謡を録音するようになる。これらの多くは芸術的・児童文化的な高度性より多くの子どもたちに受容されることを第一義として作られざるを得なかったため、歌詞は耳で理解できる分かりやすいもの、曲はセンチメンタルで歌いやすいものが要求される傾向にあった。また、こうした童謡を歌う少女歌手たちの喉をつめたような発声法も批判の対象となった。そのため、こうした童謡は「大衆としての子どもに阿た童謡」あるいは、「芸術的価値の低い大衆の童謡」という含みを持たせて「レコード童謡」と呼ばれるようになったのである（上笙一郎編『日本童謡事典』東京堂出版、2006年、428頁など参照）。
 - 14 『ラヂオ年鑑昭和26年』日本放送出版協会、1951年、95頁。
 - 15 公には閲覧できない文献だが、本研究のために閲覧の許可を得、内容の書き写し作業を行った。
 - 16 日本放送協会編『日本放送史上』日本放送出版協会、1965年、巻末資料参照。
 - 17 同前、594頁。

- 18 日本放送協会編『日本に於ける教育放送』日本放送協会, 1937年, 108頁。
- 19 総理府統計局『第二回日本統計年鑑』日本統計協会, 1951年, 410頁。
- 20 他に、(主に「学校(幼稚園を含む)」を対象にした)「無料聴取加入数」を主要な都市ごとに示した資料によると、『幼児の時間』の放送が開始された昭和10(1935)年から12年(1937)末にかけて東京では181園から216園(他大阪では160園から186園など)だったのが、終戦後の昭和22(1947)年には東京で295園など都市部の合計では760園が聴取加入園となっている(『放送』12月, 日本放送協会, 1936年, 53頁/同11月, 1937年/同3月, 1938年/『ラジオ年鑑昭和23年』日本放送出版協会, 1948年, 231頁参照)。
- 21 総理府統計局『第三回日本統計年鑑』日本統計協会, 1952年, 374頁。
- 22 総理府統計局『第十二回日本統計年鑑』日本統計協会, 1962年, 458頁。
- 23 総理府統計局『第三回日本統計年鑑』日本統計協会, 1952年, 374頁。
- 24 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに, 1979年, 820頁。
- 25 同前, 827頁。
- 26 同前, 831頁。
- 27 放送文化研究所編『幼児向け放送の研究』放送文化研究所, 1950年, 30頁。
- 28 同前, 35頁。
- 29 同前, 34頁。
- 30 同前, 25頁を参照。
- 31 同前, 46頁。
- 32 同前, 107-109頁。
- 33 文部省『うたのほん下教師用』1941年, 29頁。
- 34 同前, 118-119頁参照。
- 35 『ラジオ年鑑昭和26年』日本放送出版協会, 95頁。
- 36 放送文化研究所編, 前掲, 125-133頁。

付記

本稿は、平成25年度岐阜聖徳学園大学の研究助成を受けて行った研究成果の一部である。